源氏物語にみえる錦の比喻

一、春の景物を錦にたとえる

春の花が咲き乱れる美しさや、紅葉の美しさを錦にたとえる表現もみられる。「古今集」や「万葉集」等、平安朝の詩歌にも多く織り上がっている定型的な比喻である。「源氏物語」には、自然の美しさを錦にたとえる表現もみられるが、宴に集まった錦を織る人々の様子を自然の美景にたとえる表現もみられる。「源氏物語」「若菜社」の住吉社頭での宴の場面、若菜下の住吉社頭での宴の場面、そして「胡蝶」における六条院での船楽の場面である。これらの場面は源氏物語が権力の周囲に集う人々を自然の美景にたとえることを示すのだろう。また、「錦」にたとえられる明石上の存在についても考察する。

三、住吉の引きを描く

人々の様子を「秋の錦」、春の錦にたとえる。
一、春秋の景物を「錦」にたとえる

『源氏物語』には、春の美しさ、秋の美しさを「錦」のたとえで描写する場面がある。

『紫』では、瘜の治療に訪れた北山の風景を、

明けゆく空はいったう雲みて、

山の鳥もそこはか

となく喫し作りにだした

なれ

に散りまじり、錦を敷けると見ゆるに、鹿のたず

み歩くもめざらしく見たまふに、

やましさも紛れ

てぬ。

と描写する。春の美しさは色とりどりの落花に代表され、

錦にたとえられている。「紫明抄」、『河海抄』は「花の

記にたとえられている。」「紫明抄」、『河海抄』は「花の

けしきをせきて」にひかか錦をしるにはと見えつつ、

げたまくをしきょうから錦をしるにはと見えつつ、

後に秋の美しさを概した時

にてよめる。（原作による）を引く。

『藤觀』では、

冷泉帝、朱雀院が六条院に行幸した時

の様子を

と描写する。六条院の美しさを表すものとして、「錦」の

よう散り敷く紅葉を描く。

場面がある。

「薄雲」には、

光源氏が斎宮御御に春秋の優劣を論ずる

ように散り敷く紅葉を、「錦」とたとえる背景について考え

申していきたい。

やむことなき家の子どもなどにて、

青き赤き白檀、蘇芳、葡萄染など、

常のごと、例の角髪に、類ばかりの

けしきをせきて、

短きものをほのかに舞ひつつ、

紅葉の陰にかへり入るほど、

日の暮るるもいと惜しじ

なり。

やむことなき家の子どもなどにて、

青き赤き白檀、蘇芳、葡萄染など、

常のごと、例の角髪に、類ばかりの

けしきをせきて、

短きものをほのかに舞ひつつ、

紅葉の陰にかへり入るほど、

日の暮るるもいと惜しじ

なり。

やむことなき家の子どもなどにて、

青き赤き白檀、蘇芳、葡萄染など、

常のごと、例の角髪に、類ばかりの

けしきをせきて、

短きものをほのかに舞ひつつ、

紅葉の陰にかへり入るほど、

日の暮るるもいと惜しじ

なり。
点線部のように、花、紅葉の美しさを比べて春秋の優劣を判じようとしている。そして、春を代表する景物「花」は、傍線部「唐土には、春の花の錦にしろものなし」とあるよう、「錦」にたとえられる。「春の花の錦」は、陳の李爽の『賦得芳樹』の芸文類聚と木部、木に「春至花如錦」には、夏近葉成緑、中唐の劉禹錫の『春日書懷、寄東洛白二十一』、楊八三庶子こに、野草芳菲紅錦地、遊絲繚碧羅天、千載佳句・四時部・春興、和漢朗詠集に、春興・一九番とあるように、中国詩の表現をふまえたもの。春に咲いてる木や草の花、または落花のたとえとして「錦」を用いることは、中国詩の定型的な比喩である。日本漢詩でも、懐風藻、九四番・藤原方真の五言、春暮於新壇池置酒に「天霽雲衣落、池明桃錦舒、文華秀麗集」、〇〇番・錦乱飛機上奪文紗、和漢朗詠集に、春興・三番・藤原冬嗣・奉和河陽十詠に「河陽花」に「吹入江中如濃霧」一方、和歌の例は、早く『万葉集』（巻六・一〇五六三番）に「前略」くうひすの來鳴春へは、巻には山下光錦なす。花咲きを募り（後略）の一例があるが、後続の例は多くはない。

「薄雲」の波線部「大和言の葉には、秋のあはれをとり

『薄雲』の点線部同様、春の花、秋の紅葉の優劣を比べ、黄葉への愛着を述べ、「秋山そ我在」と秋の優位性を詠む。「春の花に対抗する秋の「紅葉（黄葉）」をたとえ、中国詩においては、「錦」は本来、「春の花」をたとえるものであったが、日本では、「秋の紅葉」のたとえに使われようになる。紅葉あるいは落葉をたとえる。懐風藻の「六・一番」に収められた大津皇子、七言、述志、首の一例。なお、中国詩では、紅葉の美しさを詠む詩自体がほとんどない、よって「紅葉」を「錦」にたとえる例を見つけることはできない。
には人々の様子を「秋の錦」、「春の錦」にたとえる例もある。松風で、春に光源氏の花の別荘を訪れた人々の姿が次のように描かれ、

「松風」では、春に光源氏の花の別荘を訪れた人々の姿は次のように描かれ、

もう見間かまほしさ御ありさまならば、斧の柄も朽ちぬべし。「に{text:break}」

品々にかづけて、霧の絶え間に立ちまじりたるも、前

近衛府の名高き花人、物の節どもさぶらぶに、さ

うぞうしれば「その駒」など亂れ遊びて、脱ぎか

けたまふ色々、秋の錦の風の吹きおぼかと見ゆ。

傍線部「秋の錦」は、紅葉のこと。「うつば物語」、菊の

宴に、「九月、紅葉見人の山辺にあり。田刈り積めり

という詞書を持つ屏風として、中将実頼が詠んだ「織り敷

ける秋の錦にまとして刈り摘む稲をそこにこ見れ」の

例がある。「松風」の当該箇所においては、桂の院での光

源氏主催の宴の後に桜として与えられた色とりどりの錦を

被いて人々が乱れる様を紅葉風に乱れる様にたとえる。

「錦」の語は用いられてないが、傍線部「前栽の花」も

で追いかけてきた中将が、「山の錦はまだしる侍りかに

野へその花を盛りに待て」、「とある如くの秋の野の花を錦」ととえる

ことがある。よって、「松風」のこの場面は桜の前栽に見立

てているものですと考えられる。この前日、光源氏の花の錦を慕って

点線部「斧の柄も朽ちぬべけれど」は「延徳記」に見られ

る王賢憲の故事をふまえたもの。晋の時代に王賢ととい

う人物が、信安郡の石室山に木を伐ち入れた時に数人の

童子が開幕をしているのに出会い、一局が終わらないうちに

帰ってきたが、斧の柄が燃えてしまい、同時代の人々は

皆おらず、山中「仙界」と下界の時流の違いを知る。

というのがその大意である。「松風」には、桂の院に行く

と紫上が「斧の柄さへあらためたまはもどり、待ち遠
「新撰万葉集」の詩歌は日本の古い春霞を漢語の中で表現したものです。

霞の色は「初日朝霞」「和風の霞」を基調とした風呂敷の情景とは対照的である。前半の白い霞のイメージが重なる鮮やかな台詞に、後の「雲の錦を衣さ」という台詞の情景を基調とした множ様の情景とは対照的である。前半の白い霞のイメージが重なる鮮やかな台詞に、後の「雲の錦を衣さ」という台詞の情景を基調としたものである。
「源氏物語」にみえる「錦」の比喩
やかに、何ごと思ふらむと思ってうち散らたるに、若

須磨・明石に同行し、ともに苦労した右近将監

言われる家来達の姿が、色とりどりの紅葉。秋の花を散

らしような華やかな光景であるとする。

また、「若葉下」には、同じく住吉社に譲でた光源氏一

行の様子が以下のように描かれられる。

十月中の十日なれば、神の斎いでふる葛も色変わり、

木高き松風に吹かれてたる笛の音も、外にて聞ひ

を離れてととのへとりたる方、おどろおどろしがちぬ

を聞こえり。山中に響ける竹の節は松の緑に見えまが

ひ、かがしの花のいろいろは秋の草に異なるけじめ分

かれで、何ごととも目のみ紛いふる。求子はつる末に、

若やかな上達部は肩ぬきでおりたまぶ。にほひもな

黒き袍衣に、蘇芳 дизン。葡萄染の袖をはかにひき

綻ばしたるに、紅深き袴の袂の、うしけくれたるにけ

しきばかり濡れるる、松原をば忘れて、紅葉の散るに

思ひわたるより。

さまざまな色の「かがしの花」を秋草の彩り、光源氏を慕

う上達部の装束の彩りを散る紅葉の彩りにたれとる。秋草

も紅葉も前述のとおり、「錦にたとりられるものである。

常緑の松は住吉社の神威を示すもののである。そこには、時々

はその松の緑は住吉社の神威を凌駕するほどに、源氏一行の作り出す秋草

に見まがう彩りを添えられているのである。神威を示

し常磐の緑と人為による色の移ろう。「秋草」、「紅葉」が調

和することから、光源氏の栄華が神によって約束されてい

ることが窺える。

「若葉下」の住吉社の時には、光源氏自身は准太上皇、

の明石周君は女御、その第一皇子は東宮となっており、

一族は栄華を誇る。紫上、明石上、明石女御、明石の尼君

96
しは、次のように描写される。

松原に、はるばと立てつづけた御車とも、風に
うらびく下薙の隙々も、常磐の陰に花の錦をひき加
へたると見ゆるに、袍衣のぼろいこけめおきて、下
人々など

出だし仮は「花の錦」をたとえられ、二章で挙げた「初
音」の男踏見物の際の出だし仮を、曙の空に春の錦たち
出でる霞とたとえることを「錦の松」として、光源氏の栄
華を特に支えている女性たちである。このうち「錦」を
も描かれる明石上に注目したい。

松風では、明石上を都に送り出す明石入道が、娘の
身上について、君のようやうおとなびたまひの想は知るべしにそ
へたれば、などの口惜しみ世界にて錦を隠しきゆら

「源氏物語」にみる「錦」の比喻

「錦の松」を引き、「錦の松」と注記する。「紫明抄」を「河海
抄」は同じ引用に「朱賀臣伝」と注記する。『古今集』（秋
下・二九七番・北山に、もし折らむてたまかれりける時
に、よめる・紀貫之）に「見る人のなくて散りぬる奥山の
紅葉は夜の錦なりけり」とある。『芸文類聚』（錦）に「漢
書曰（中略）項羽曰（中略）富貴不帰故郷如衣錦夜
行」とあることから、「錦」の項羽本紀をふまえた歌とさ
れる。ただ、現行の『史記』項羽本紀は「富貴不帰故
郷如衣錦夜行。歌意は見る人がいないまま散ってし
まう奥山の紅葉は夜に錦を着て帰るように行ってい
思ひたまふればなむ。歌の紅
葉は、ひとり見はべるに錦くら思いしたまふればなむ。歌
に持ちたせたたへリし紅葉を蜜奨に献上した時に、「紅

『源氏物語』にみる「錦」の比喻
この御使なく、闇の夜にこそ暮れべかりければ
表現する『闇の夜』は、『闇の錦』のこと。史記の故
事をふまれたもの。姫君誕生五十日のせっかくの飲びも、
光源氏からの使いがこなかったから『闇の錦』のように甲
妻がないことだ、とする。

明石上親子は、優れた美質を持ちながら、田舎に沈むす
生存念残念存在をとらえており、実際、前掲の『瀬戸瀬』
の住吉話では、光源氏の住吉話に同時期に明石より住吉話
にでかけた明石上が描かれており、点線部『田舎人』こそ
が明石上その人であり、光源氏の威勢に圧倒されている。

一方、『若葉下』の住吉話は、明石上とその娘、さらには明石上の母尼君が『花の錦』の
明石上とその娘。さらに、明石上の母尼君が『花の錦』の
一画を担い、晴れてその美質を発揮する。その姿は点線部
人夜なれ、盛儀を見物する側から盛儀の当事者になり賞賛される
側となっている。

若葉下の住吉話は、住吉の御願かがたしたま
う趣旨で行われたものである。光源氏が娘の将来を住吉社
に期待していたが、娘が女御となり、孫が春宮となったこ
とによる願はとどきである。その際、光源氏は、明石入道が
とし出した『かの箱』に収められた明石一族の繁栄を願った
文のあらすじに沿ってまとめてみる。

これまでみてきた『源氏物語』中の『錦』のたとえを本
歌語、詩語の常套句で表すのが、筆者はここに『織る
のとしたい。この雰囲気は、若紫と出会う、明石上の
高を聞き、後の紫、若紫と出会い、明石上は『明石』で光源氏と結ばれるが、光源氏は単身、
若菜下では、光源氏は紫上、明石上、明石女御、尼君をつれて住吉社へ一族の栄華に対するお礼参りをする。そこでして盛装した光源氏を慕う女性たちに、紅葉の錦を再現し、その姿は住吉社の松を背景に一段と映えるのであった。『澪標』、「若菜下」の住吉社頭での宴の場面。「初音」の六条院での男踏歌の場面。そして「胡蝶」における六条院での船業の場面は光源氏が権力を掌握していることを示す重要な場面である。そこでは光源氏を慕う集った人々の花の錦、霞の錦、紅葉の錦はいずれも自然の妙な繊りなす造化を作り出す。竜妙な力があるのだ。

『澪標』、「若菜下」では、光源氏は紫上、明石上、明石女御、尼君をつれて住吉社へ一族の栄華に対するお礼参りをする。そこでして盛装した光源氏を慕う女性たちに、紅葉の錦を再現し、その姿は住吉社の松を背景に一段と映えるのであった。『澪標』、「若菜下」の住吉社頭での宴の場面。「初音」の六条院での男踏歌の場面。そして「胡蝶」における六条院での船業の場面は光源氏が権力を掌握していることを示す重要な場面である。そこでは光源氏を慕う集った人々の花の錦、霞の錦、紅葉の錦はいずれも自然の妙な繊りなす造化を作り出す。竜妙な力があるのだ。

光源氏は人並み外れた能力の持ち主であることが窺える。「澪標物語」にみえる『錦』の比喩をたどると、光源氏の人並み外れた能力を持つ特別な女性であることが分かれる。
日本古典文学全集（小学館）によると、私に適宜傍線を施した
また、和歌の番号は「新編国歌大観」によると、表記は私に改
めた場合がある。

海抄、河海抄の引用は、山下採編、山下撫との、河海抄「春の花の錦

詠の注として、藤原宗長の春花詠を五十里錦障には、出典未詳

江流長女、山下採編、河海抄の春花詠を五十里錦障には、出典未詳

海抄、河海抄の引用は、山下採編、山下撫との、河海抄「春の花の錦

詠の注として、藤原宗長の春花詠を五十里錦障には、出典未詳

江流長女、山下採編、河海抄の春花詠を五十里錦障には、出典未詳

海抄、河海抄の引用は、山下採編、山下撫との、河海抄「春の花の錦

詠の注として、藤原宗長の春花詠を五十里錦障には、出典未詳

江流長女、山下採編、河海抄の春花詠を五十里錦障には、出典未詳

海抄、河海抄の引用は、山下採編、山下撫との、河海抄「春の花の錦

詠の注として、藤原宗長の春花詠を五十里錦障には、出典未詳

江流長女、山下採編、河海抄の春花詠を五十里錦障には、出典未詳

海抄、河海抄の引用は、山下採編、山下撫との、河海抄「春の花の錦

詠の注として、藤原宗長の春花詠を五十里錦障には、出典未詳

江流長女、山下採編、河海抄の春花詠を五十里錦障には、出典未詳

河海抄は、河海抄の一節「ふゆになり、第七・八番『山をもい

河海抄は、河海抄の一節「ふゆになり、第七・八番『山をもい

“源氏物語”にみえる「錦」の比喩

13. えたもととする。

14. 『類聚句題抄』では、花の錦を機に編むという、この

15. 題で菅原雅規『一十八番』を詠んだとされている。番

16. 号は本間洋一『類聚句題抄全注釈』（和泉書院・二〇〇〇年）

17. 会編の『本朝麗藻薄』（松風堂・一九九八年）によると、

18. 小林正明『蓬萊の島と六条院の庭園』（鶴見大学紀要）二

19. 月等。『新撰万葉集』は新撰万葉集研究会編『新撰万葉集注訳

20. 田中隆昭『仙境表現の本朝文書の再考』とその関わりについて』

21. 今浜通隆『本朝麗藻薄全注釈』（新社・一九九五年）

22. 本文に挙げた『栄標の松原の深緑なるに、花紅葉をこ

23. き散らしたと見ゆる袍衣』の花紅葉は、秋の花をい

24. う可能性がある。北山の神秘性については、多くの先行論文がある。
・・・